

旅と新型コロナ

斉藤 征雄

旅人と我が名呼ばれん初しぐれ 芭蕉

「もうし、旅のおひと」と呼ばれる身に、早くなりたいという意味。『笈の小文』の出立吟であるが、生涯旅の人であった芭蕉ならではの句である。

旅は、定住する地の日常から離れることである。日常を離れて知らない世界に立つことよって、ともすれば自分の人生とは何かを知らず知らずのうちに考えるきっかけになる。旅が好まれるのは、そこに何かしら新鮮さを感じられるからだろう。

旅に出なくても、自分を見つめたり考えたりすることもできなくはない。ただ、人にもよるだろうが日常生活は思索には不向きで、概ね繰り返しが多いから人の考えを消極的にもする。だから旅に出る。

しかしいくら旅が好きでも、芭蕉のように一生死ぬまで旅人であることは凡人にはできない。われわれ凡人の旅はあくまで、帰れるから楽しいのである。日常から離れるのが楽しいのは、旅が終わればまた日常に戻れることがわかっているからなのである。

私は、旅好きなカミさんと一緒に旅行することが多いのだが、これまでも「ぶん」にわか旅人」になって旅をした。身体が弱る前に遠いところから制覇しようということと海外から始めたが、かなりの国を巡った。もちろん、綿密に計画されていて、かつ言葉の障害も起こらないツアーによってである。

残りいくつかの都市へ行って、あとは国内旅行へ切り替えようと言っていた矢先に、新型コロナが発生した。最後に行ったUAEが去年の一月末だから、今にして思えばギリギリで危ないところだった。

今やコロナは人間から、知らない土地を旅する楽しみを奪おうとしている。かつてヨーロッパ人が世界の後進地域を侵略したとき、武器よりも持ち込んだ感染菌の影響の方が大きかったと言われるが、現在人類は、地球上を移動することに、まさにそれを地で行く恐怖を体験させられている。

解決策は、どうもワクチンによる封じ込めしかないようだから、残された旅を楽しむためにも、辛抱強く順番待ちの列に並ぶとしよう。